●ぜにや・まさみ
1949年生まれ。秋田市土崎港出身。秋田高校～東北大学教育学部卒。1973年文部省入省。大臣官房審議官、内閣審議官、文化庁次長、文部科学省生涯学習政策局長、初等中等教育局長を経て2007年文部科学事務次官就任。2009年8月より現職に就く。趣味は博物館めぐり、読書。

東京国立博物館 館長
銭谷 眞美

# 秋田、思い出ずらり
## ～かすべ・コンビーフ・だまこもち・年取り膳～

一、土崎のお祭りとかすべ

私は、昭和31年（1956年）秋田市土崎港の港北小学校に入学しましたから、小学校時代は昭和30年代、日本の高度経済成長のとば口に当たります。その頃の「食事」のお話です。

毎年、7月20日、21日は土崎神明社の「土崎港曳山まつり」です。今では国の重要無形民俗文化財に指定され、各町内から20数台の武者人形をのせた山車が出され、「港ばやし」に合わせ町内をねり歩きます。特に21日夜の「戻り山車」は、荒々しい所作で山車が引かれる一方で、哀調を帯びた「あいや節」が奏でられるお祭りのハイライトです。

土崎のお祭りは別名「かすべ祭り」とも呼ばれます。エイの煮付け「かすべ」は独特のにおいと甘辛さがあり、最高のごちそうでした。

二、大浜海水浴場とコンビーフ

夏休みの楽しみは海水浴でした。現在、秋田製錬㈱やコンテナ埠頭のある土崎港の新城川近くの砂浜は、当時「大浜」と呼ばれ、海の家もある海水浴場となっていました。

家から近いこともあり、暑い夏の夕方、よく父に連れられて遊びにいきました。父は、学生時代水泳部で背泳ぎの選手でした。子どもらが泳ぎ疲れて砂浜にあがった頃、父は沖合いで一人で泳ぎ始めます。日本海に沈む赤い夕日をバックに、浜辺と平行にゆっくり大きな背泳ぎのストロークで、水をかきながらスーッと進んでいく父の姿は、子ども心にカッコいいと思ったものでした。

海からあがった父は、夕食前のビールを飲み始めます。そのときのおかずが決まってコンビーフでした。台形の枕缶と呼ばれるコンビーフの缶のまわりを帯状にまきとる鍵をクルクルまわすと中味が溢れるように出てきます。それをいくつかに切って皆で分けて食べると運動の後の空き腹に本当においしく感じられたものでした。アメリカ人みたいだとも感じましたが、実は巻き取り鍵はコンビーフが日本で発売された1950年に採用されたそうです。

三、秋の夜長のだまこもち

秋は新米の季節です。きりたんぽやだまこもちなど新米を使った鍋料理のおいしい時期です。母は五城目の出身でだまこもちが大好きでした。古い家でただ広いだけの台所に女性たちが大勢集まり、新米を炊き、ご飯をつき、皆でだまこもちを丸めるのが毎年の恒例行事になっていました。子どもの印象では、今の市販のものよりだいぶ大きめでピンポン玉ほどあったでしょうか。実家は会社を経営していたため、そこに祀られていたお稲荷さんに皆でお参りし、従業員一同でだまこもちの宴会をするのが楽しみでした。昭和36年の国体の時は旭化成、小林高校などからなる宮崎県の陸上チームに臨時で自宅を宿泊場所として提供しておりました。そのときに皆で一緒にだまこもちを食べたのも懐かしい思い出です。

四、年取りの会

我が家の年末年始は、お正月のおせち料理よりも、大晦日の夜に行われる「年取りの会」の料理の方に力が入っていました。

大晦日の午後には、家族が交代でお風呂に入り身を清めます。そしてお正月用の新しい服を着ます。夕方4時頃には家族全員が一人一人に用意されたお膳の前に座ります。家長である祖父と跡取りの父が順番に、1年の無事をことほぎ、来るべき新年が良い年となるようあいさつをして会が始まります。

お膳にはお頭付きの年取り魚やお肉のほか、お刺身、カズノコ、ナマス、カンテン、くりきんとん、黒豆、イクラ、お寿司、ハムなど子どもが喜ぶ料理が並び、1年で一番豪華な夕食となります。子どもたちはおなかが満ちれば、用意された「やせうま」（お年玉）をもらいます。大人たちは除夜の鐘がなるまで話し込み、やがて初詣に出掛けます。

子どもの頃は貧しかったかわりに、季節に応じた楽しい食事の場面があったと懐かしく思い出しながら書いてみました。